

記事

Editorial



「ジオパークと地域資源」創刊の経緯と趣旨

Aims of Launching “Geoparks and Regional Resources”

目代邦康^{1*}・栗原憲一²・井口博夫³・先山 徹³・鈴木雄介⁴・チャクラバルティー アビック⁴・
豊田徹士⁵・新名阿津子⁶・廣瀬 亘⁷・堀内 悠⁸・松原典孝³・熊谷 誠⁹

MOKUDAI Kuniyasu¹, KURIHARA Ken'ichi², INOKUCHI Hiroo³, SAKIYAMA Tohru³, SUZUKI Yusuke⁴, CHAKRABORTY Abhik⁴, TOYOTA Tetsushi⁵,
NIINA Atsuko⁶, HIROSE Wataru⁷, HORIUCHI Yu⁸, MATSUBARA Noritaka³ and KUMAGAI Makoto⁹

1: 自然保護助成基金 2: 北海道博物館 3: 兵庫県立大学 4: 伊豆半島ジオパーク推進協議会 5: おおいた豊後大野ジオパーク推進協
議会 6: 公立鳥取環境大学 7: 北海道立地質研究所 8: おおいた姫島ジオパーク推進協議会 9: 白滝ジオパーク推進協議会

1: Pro Natura Foundation Japan 2: Hokkaido Museum 3: University of Hyogo 4: Izu Peninsula Geopark 5: Oita Bungo-Ohno Geopark 6:
Tottori University of Environmental Studies 7: Geological Survey of Hokkaido 8: Oita Himeshima Geopark 9: Shirataki Geopark

2015年11月24日投稿, 2015年12月11日受理

はじめに

本誌「ジオパークと地域資源」は、ジオパークの理念を共有し実践をする住民、研究者、行政担当者、観光業者、教員、政治家、ナチュラリストなどが、地域や既存の専門分野の枠を超え、現代における諸問題の解決をはかる新たな分野の開拓を目指して、学際的に地域資源の保全と活用の有用性を自由に論ずる場として創刊するものである。本稿では、この雑誌の創刊の経緯と趣旨について説明する。

サイエンスコミュニケーション
の場としてのジオパーク

現在、地球科学の諸分野においては、専門家によって先端的な研究が進められ、その成果は国内外の学術誌に公表されている。その内容は高度化、洗練化されているが故に、その議論の場に専門家以外の人間が関わるのが難しく、その成果は誰もが理解できるものにはなっていない。地球科学者の多くは、研究を進めることにより、人類共有の知的財産を増加させ、その応用によって生活環境の快適化と、自然災害被害の軽減化がはかれると考えている。しかしながら現在の専門家からの情報発信のあり方では、一般市民にその情報が届いたとしても、それがそのまま理解されるということは少ないだろう。また、一市民の立場からみれば、自らの暮らしに最新の科学の成果が関わるという実感はあまり持っていない（例えば早川、2014）。

こうした専門家と一般市民との認識の齟齬が生まれてしまうのは、科学者と非科学者との意識の断絶があり、コミュニケーションが不十分であることが、その理由と

して考えられる。こうした状況を改善させるためには、様々な立場の人がそれぞれ科学的視点と思考を持つ必要があり、一方で科学者は、開かれた議論の場を整備していくことが必要である。

現在、人類が直面している諸問題の中には、これまで人類が積み上げてきた科学の成果の中から生まれてきているものもあり、従来の科学的視点と思考では、根本的な問題解決に至らないことも多い。現状のままでは、将来的に人類の生存に重大な問題が生じることも予想されている。こうした中で、必要とされているのは、人類が、地球上に存在する様々な多様性（ジオ多様性、生物多様性、文化多様性）の中で存在しているという認識を持ち、その上で、その多様性を適切に保全し活用することである。

そうした多様性を実感することができる場の一つがジオパークである。ジオパークを訪れ、その活動に携わることによって、地球の多様性の中に暮らしていることと、科学の営みを担う一員であることを自覚できるようになるだろう。

科学の営みは好奇心から生まれる。科学は、興味をもった対象をよく観察し、その実態を記述し、そのものの本質を考える行為といえよう。こうした行為を行う人は、一般に科学者と呼ばれている。科学者は、現代社会においては職業専門家と同義で使われることが多いが、本来的には読んで字の如く科学をする者である。自ら観察し、記載し、考察を行う人であれば、地域住民でも旅行者でも誰でも科学者になれる。ジオパークは、これまで地球科学の研究に携わってきた先輩地球科学者が整えた学びの場であり、そこは訪れた人を科学の世界に誘う場でもあり、自らが調べ問題を解決していく科学者を育てる場といえよう。

日本のジオパーク活動における情報の蓄積

2007年頃より動き始めた日本のジオパーク運動は、わずか数年で急速に拡大した。現在では研究者、各地の住民、行政担当者、観光業者、ツアーガイド、教員、政治家、ナチュラリストなど、多くの人が関わるようになり、各地で様々な交流が生まれ、新たな実践が展開されている(渡辺, 2014, 2015)。

多様な立場の人間が関わるジオパークの活動であるため、関係者が一堂に会する機会は多くはなく、その活動から得られた知識や経験を共有するのは容易ではない。日本ジオパーク全国大会や研修会、関連する学会の場、あるいは各地で実施されているシンポジウムやフォーラムなどで発表されてきた内容の一部は、商業誌、学会誌などで公表されてきたが(例えば、渡辺, 2008; 天野ほか, 2009; 菊地ほか, 2011; 目代・小荒井, 2011; 目代, 2014)、全体の中ではごく一部である。日本ジオパーク全国大会をはじめ、研修会やシンポジウム、フォーラムでの議論を包括的かつ継続的に記録し残していく仕組みは存在せず、多くは口頭やポスター発表だけで終わってしまっているのが現状である。

最近、各地のジオパークの活動の報告や制度の分析などの研究は、大学や博物館などの紀要や学術雑誌に掲載され(日本地理学会ジオパーク対応委員会, 2015)、また、ジオパークに関する単行本も発行されるようになり(例えば、尾池ほか, 2011; 目代ほか, 2015)、ジオパークの仕組みや活動に対しての認識は深められてきている。しかし、それらの発行は研究者、学会あるいは出版社の裁量に委ねられており、永続的に発表の場が確保されている訳ではない。現在のような多くの人が関わる日本のジオパークのネットワークのなかで、ジオパークに携わる人らが、自らの意思で発行する媒体を持つことの意義は大きい。

地域資源の保全と活用を目的とした活動を進めていく上で、これまでの成果の蓄積は礎となる。様々な成果が公表されることにより、新たな議論が生まれ問題の本質に近づいていくことができるだろう。過去の経験を参考にし、あるいは検証していくなかで、新たな、より深化した活動が産み出されることになる。以上のような認識に基づき、ジオパークに携わるあらゆる人が、自由に意見を述べ議論する場として、さらに、それがいつでも参照できるものとして、この「ジオパークと地域資源(Geoparks and Regional Resources)」を創刊した。

創刊の経緯

2014年9月の日本ジオパーク全国大会南アルプス大会(以下、JGN南ア大会)で開催された全国大会の際、日本ジオパークネットワーク(JGN)活性化部会が開かれ、そこで筆者の一人である目代が、「JGNに求められる機能」と題して、議論・研究のアーカイブのため、ジオパークにおける活動報告、研究報告を電子ジャーナルとして発行すべきという提案を行った。その効果として、後発のジオパークが議論を追跡できるようになること、各ジオパークの活動が可視化されること、ジオパークの専門員の活動が論文化されやすくなることなどが示された。その提案は、その場で承認され、有志によりその準備が進めることとなった。

当時、ジオパークに関わる行政担当者、専門員、関係研究者の何人かは、議論の場や情報の共有の場が必要だと感じていた。例えば、JGN南ア大会のポスターセッションの準備の議論の中で、隠岐ジオパークの平田正礼氏と本稿の著者の一人である栗原は、全国大会後のアウトプットの受け皿の必要性について議論している。各地の担当者が、情報の共有や蓄積の仕組みがないことについて問題意識を持つようになっていたのが当時の状況であろう。

上述の活性化部会の後、2014年10月に入ってから目代と栗原とで、電子ジャーナルの発行形態等について電子メール上で議論をすすめた。大枠が決まった段階で、栗原から活性化部会のメーリングリストへジオパークジャーナル(仮称)の概要の説明と「ジオパークジャーナル構想ワーキンググループ」メンバーの募集の案内を流した。メンバーは活性化部会メンバーに限らず、ジオパーク関係者であり、創刊に向けて協力する意思があれば参加を認めた。

こうした議論が進む中、本誌の発行計画とは別に、兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科ジオ研究領域では、広くジオパークに関する研究成果公表の場としてジャーナルを発行し、各地のジオパークに投稿を呼びかけることを検討していた。その趣旨は、前章のものと近かったことから、兵庫県立大のメンバーは、ジオパークジャーナル構想ワーキンググループに皆加わることとなった。

活性化部会の中のワーキンググループであるので、そのメンバーである栗原がリーダーを務めることとなった。2014年11月に入り、そのメンバーによって、メー

リングリストでタイトルやジャーナルの目指す方向性など議論を重ねた。その議論の中で、対象をジオパークに限らず、地域資源を保護・保全、活用し、持続的発展を目指すプログラムなどの成果も含めるという方針となった。

2015年2月にJGN役員地域事務長会議において、「活性化部会とワーキンググループの設置（現状と対応方針案）」が策定され、正式に活性化部会の中にワーキンググループが位置づけられることとなった。その後、投稿規定をはじめとする各種規定、様式の整備を行い、同時進行で原稿の査読、編集をすすめてきた。

2015年5月のJGN活性化部会において、ジャーナル発行の体制が整ったことを報告し、ワーキンググループの解散と、そのメンバーの編集委員会への移行が報告され、部会にて承認された。本稿の執筆者は、このワーキンググループのメンバーであり、2015-2016年度の編集委員会メンバーである。

「ジオパークと地域資源」の射程

本誌は、ジオパークやそれに類似するプログラムにおける活動の報告や分析結果、制度の研究、また、地域資源の記載や分析結果などを掲載する。昨今、既存の専門学術誌においては、各地に存在する自然物の記載論文は学術的価値が認められないと掲載されにくい。しかし、本誌では、それぞれの場所にあるものの価値が、ジオ多様性（geodiversity）の基礎となるものであり、そうした情報の蓄積を十分に行うことこそが質の高いジオパークを作り出していくために必要な活動であると考えている。そのため、各ジオパークに存在する様々な地域資源の報告は積極的に掲載したいと考えている。

本誌の名称が「ジオパーク」と「地域資源」となっているのは、ジオパークについてのみ論じるだけでなく、地域資源の保全と活用のあり方についても幅広く議論していきたいと考えているためである。地域資源の持続可能な開発（sustainable development）のあり方がその実践の中で議論されている、UNESCOのMan and the Biosphere Programme（MAB）や、ラムサール条約、世界遺産条約などの諸制度での議論と実践や、そうした制度には拘わらずに行われているエコツーリズムやエコミュージアム、そして各地の自然環境の保全と活用に関する様々な活動での議論が、本誌の射程である。

これまでのジオパークに関する議論を概観しても、ジオパークの活動の中から得られた知見は、ジオパークの活動にのみ役立つものではなく、地域資源の保護・保全と活用をベースとした様々なプログラムにおいても役立つ

つものであり、その汎用性は高い。その逆も真であり、ジオパークの分野が他の分野の活動から学ぶものも多い。様々な分野からそれぞれの視点で議論を展開していただき、相互に良い影響を及ぼしあいながら、それぞれの活動が発展していければ本誌を創刊した意義があったといえよう。こうした機能をより有効にするためには、なるべく多くの方に見ていただく必要がある。そのため、本誌は電子ジャーナルとして刊行する。

ジオパークの活動では、評論家よりも実践家が必要とされている。ジオパークの管理運営者、地域の地球科学的資源について記述しその科学的価値付けをする科学者、ビジターを受け入れる観光業者、ビジターにそれぞれの現場の面白さを伝えるガイド、そしてその地域に暮らして様々な場面でジオパークを利用する人など様々な立場で、感じ、考えたことを、本誌を使って多くの人と共有していただきたい。繰り返しになるが、本誌は、自由な議論の場となることを目指している。ジオパークを含め、地域資源の保全と活用に携わる多くの方の投稿を期待したい。

文 献

- 天野一男・小泉武栄・目代邦康・原 英俊（2009）巻頭言：ジオパーク — 地球科学がつくる持続的な地域社会 —。月刊地球, 31, 363-364.
- 早川雄司（2014）「国民の科学技術に対する関心と科学技術に関する意識との関連」。文部科学省科学技術・学術政策研究所 DISCUSSION PAPER, no.108, 103 p.
- 菊地俊夫・岩田修二・渡辺真人・松本 淳・小出 仁（2011）特集号「ジオパークと地域振興」— 巻頭言 —。地学雑誌 120, 729-732.
- 目代邦康（2014）特集「日本のジオパークの現状と課題」：はじめに。E-journal GEO, 9, 1-3.
- 目代邦康・小荒井 衛（2011）日本におけるジオパーク活動の展開と地図の活用。地図, 49(3), 1-16.
- 目代邦康・柚洞一央・新名阿津子（2015）「中部・近畿・中国・四国のジオパーク」。古今書院, 158 p.
- 日本地理学会ジオパーク対応委員会（2015）日本のジオパークに関連する文献。 <https://sites.google.com/site/ajggeopark/home/references> [Cited 2015/10/23]
- 尾池和夫・加藤碩一・渡辺真人（2011）「日本のジオパーク」。ナカニシヤ出版, 199 p.
- 渡辺真人（2008）動き始めた日本のジオパーク活動。地理, 53(9), 26-31.
- 渡辺真人（2014）ジオパークの現状と課題。E-journal GEO, 9, 4-12.
- 渡辺真人（2015）ジオパークの理念、枠組と現状。歴史と地理, no. 688, 1-8.